郭上海生子金像

第九卷

郭沫若全集

第九卷

岩波書店

野上彌生子全集 第九巻　第十七回配本（全二十三巻）

一九八一年十月六日　発行

定価 三三〇〇円

著者　野上彌生子

発行者　緑川亨

発行所　〒101 東京都千代田区一ツ橋二-五-五
株式会社 岩波書店
電話 〇三(二六五)四一一一
振替 東京六-二六二四〇

印刷・精興社　製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

© 野上彌生子 1981　Printed in Japan

目　次

五月祭……五
多津枝……五〇
潮の香……七九
小さい顔……九六
軽井沢……一三三
黒い流れ……二二一
熊掌と爪……二〇一
夕　雲……二六四
黒い行列……（五）

迷路……（三二）
後記……四二

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

小

説

九

迷路

(一)

亡き夫 豊一郎にささぐ

五月祭

菅野省三はそんなことは思ひ出してもゐなかつた。殆んど写字生に近い今の仕事のため、ノートを二三冊買ひながら朝昼けんたいの食事をすますつもりで、田端のアパートから松屋をさして来たのである。

「なるほど、公開日だつたのか。」

いつもの学生とはべつな群集で、公園のやうに賑つてゐる大学の若葉の美しい前庭を電車から透かして見て、はじめて気がついた。除名になつた当座の、低い煉瓦塀にはまつた鋳鉄の切つ尖が、ぐつと胸もとに突き刺さる感じを捨てきれないでゐて、そのくせ、毎日一遍はその辺をうろつかないではゐられなかつた、子供つぽいなつかしさは今は消えてゐた。

ノートのほかに、青い半罫の原稿用紙を五帖包ませてから、省三はいつになく鉢ノ木へはひつた。ここで午食

黒い行列

菅野貞三はそんなことはその時まで考へてもゐなかつた。殆んど写字生に近い今の仕事のためにノートを二三冊買ひながら朝と昼の食事を一緒にするつもりで田端のアパートを出ると松屋まで来てしまつたのである。なるほど公開日だつたのか、いつもの学生とは別な群集で公園のやうに賑つてゐる大学の若葉の美しい前庭を電車から透かして見て、それにさへはじめて気がついた。除名になつた当座の、あの低い煉瓦塀にはまつた鋳鉄の切つ尖がぐつと胸もとに突き刺さるやうな感じを捨てきれないでゐて、それで毎日一遍はそこへ入つて行かないではゐられなかつた子供つぽい懐かしさは今は消えてゐた。

貞三はノートのほかに青い半罫の原稿の紙を五帖包ませてからいつになく鉢の木へ行つ

をとるのは教授階級に限られてをり、今日のやうに大学見物のお客で近くの喫茶店や食堂がいつぱいになる時でも、わりにしづかなのを知つてゐた。青味の浮いたポタージュと、海老のフライが旨かつた。いはれるたびに小遣をはたいてミルクさへ飲まず、その空腹に一種つぐのひの満足を見出さうとしてゐた頃に比べれば、非常な贅沢であつた。しかし省三は、自分の得た金ではじめて支払へるやうになつた若者だけが知る食味を、今日は特別に愉しまうとしたのである。高橋おでんの魅惑は相変らずだなあ。しゆつと擦つたマッチを煙草にもつて行き、腰だけ赤いきれの掛つた窓から、法医学教室の陳列室の見物人が、長い列になつてつづいてゐるのを彼は往来越しに眺めた。これはこの五月に限つたことではなかつたが、とりわけ今年はおびただしい人数で、なにか強力な磁場にはいつた鉄片の層のやうに、えんえんと図書館のあたりまで伸びてゐるありさまが、食後の充ち足りた思ひで、ぼんやりその上に投げてゐた省三の、どこかまだ少年じみた瞬き方をする澄んだ眼を、だんだん鋭くした。

た。その店で午食をとるのは教授階級に限つてゐて、近くの喫茶店や食堂が大学見物のお客でいつぱいになる今日のやうな日でもわりに静かなのを知つてゐた。青味の浮いた濃いスープと海老のフライが旨かつた。云はれる度に小遣をはたいてミルクさへ飲まず却つてその空腹に満足してゐた頃に比べれば非常な贅沢でもあつたが、彼はただ自分の得た金ではじめて支払へるやうになつた若者だけの知る食味を愉しんだのみであつた。

高橋おでんの魅惑は相変らずだなあ。しゆつと擦つたマッチを煙草にもつて行くと、腰だけ赤いきれの掛つた窓から法医学の陳列室の見物人が長い列になつて続いてゐるのを彼は往来越しに眺めて、ゆつくり煙を吐いた。これは今年に限つたことではなかつた。しかし今日は取りわけ夥しい人数で、なにか強力な磁場に入つた鉄片の層のやうにえんえんと図書館の前まで伸びてゐる光景が、食後の充ち足りた思ひでぼんやりその上に投げてゐた貞三のどこかまだ少年じみた瞬き方をする瞼

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

あばずれ女の入れ墨をした一枚の皮膚、もしくは何某氏のアルコホル漬の頭脳以外に、これほどの熱情を呼びおこすものが、この前庭にはもうなくなつてしまつたのか、と彼はそれを思つたのであつた。過去の二三年間、そこを舞台として生じたさまざまな場面が、両切の端から、灰いろの輪になつて軽く流れる煙といつしよに、あたまの中で縺れあつた。一本の煙草を吸ひつくすまで、省三は左の肱を卓について窓の眼を離さなかつた。それからさめたコーヒーを一と息に飲んでおもてに出ると、ぞろぞろ続いてゐる見物人に交つて正門をくぐつた。

銀杏はすでに若葉であつた。一と塊まりづつ、簇生的に、硬い樹皮を突き破つて噴出するこの並樹の芽吹ほど、五月の激しい生命力を、学生たちの若いこころに印象づけるものはなかつた。両側から差し伸ばされ、中央で高く重なりあつた枝の撥型の幼ない葉は、芽からほぐれて間がないので、瑞瑞しく茂りながらも、青い空と、ぽつかり浮いた灰銀いろの雲を粗らく遮ぎつてゐるだけで、真夏になれば隠されてしまふ講堂の時計台の文字盤が、毛の美しい眼をだんだん鋭くした。あばずれ女の入れ墨をした一枚の皮膚。もしくは何何氏のアルコホル漬の頭脳以外にこれ程の熱情を一般的に呼び起すものがこの前庭にこの頃なにか存在しえたであらうかを彼はふと考へたのであつた。と、過去の二三年間、そこを舞台として生じたさまざまの場面がぱあつと照明装置でてらされたやうに彼の意識に浮かび上つた。一本の煙草を吸ひつくすまで貞三は片方の肱を卓に突いて窓の眼を離さなかつた。それから冷めたい珈琲を一と息に飲んでおもてに出ると、ぞろぞろ続いてゐる見物人に交つて正門をくぐつた。

銀杏の並樹は芽からほぐれたばかりの葉を五月晴の陽光に瑞瑞しく透かしてゐた。貞三はなにか無反応に紙包をぶらぶらさせてだんだんとなんの為に入つて来たかわからない気持になりながら工科の教室のまへまで行くと、不意においと肩を突かれ、農化学実験所にゐる小田健に出逢つた。

正面に遠くしろじろと見透かされた。省三はなにか無反応に、紙包をぶらん、ぶらんさせながら、どうしてそんなところへ迷ひこんだのか、自分ながらわからないで、緑の拱門(アーチ)を、人の流れのままついて行つてゐると、工科の教室のまへで、不意に、おい、と肩を突かれ、農化学実験所にゐる小田健に出逢つた。

「いつやつて来た。まだ田舎かと思つてゐたよ。」

「先月出て来たんだ。」

なあんだ、それならこのあひだのクラス会に間にあつたのに、何故知らせない。と小田は強度の近眼鏡が、厚ぼつたい縁でのつてゐるまるい頬をにこにこさせて咎めた。

「その時も君の噂が出て、手紙もよこさないでひどい奴だ、といふ評判だつたぜ。」

「一年あまりも東京を離れてゐると、筆不精になるよ。」

「とにかく、また一度あつまつて歓迎会をやらう。」

「ふむ。」

「いつやつて来た。まだ国にゐるのだとばかり思つてたよ。」

「先月出て来たんだ。」

なんだ、それならこの間のクラス会に間に合つたのになぜ知らせない。と小田は強度の近眼鏡でへんに膨れぼつたく見える円い顔でにこにこして咎めた。

「その時にも君の話が出て、手紙も寄越さないのはひどいといふ評判だつた。」

「一年あまりも東京を離れてるとすつかり筆不精になるよ。」

「とにかく歓迎の意味で一度また集まるんだね。」

「ふむ。」

省三は形のいい、まつ直ぐな鼻の片側でほろ苦くほほ笑んだ。ちやらつぽこをいふ小田ではないので、ほんの数ケ月たらひ廻しにされただけで、もろくも兜をぬいだ意久地なさをまともに非難されるより、暖かい言葉がいつそ寂しく身に沁みるのであつたが、単純でひとのいい小田は思ひがけない邂逅の悦びで、省三のさうした感じ方には気がつかなかつた。彼は淡茶の合着の肩で、相手を押すやうな癖になつた歩きぶりでついて来た。ふたりとも数歩だまつてゐた。しかし或る媒質に入る光線が、必ずきまつた角度で屈折するやうに、並樹を抜けてゐるあひだにお互ひの思念にのぼつたことは、たつた一つしかなかつた。

「あの頃に比べると、学校もすつかり変つちまつたよ。」

「学生課が暇すぎて困りはしないかね。」

「それよりか、例の脊広の紳士連があまり用事がなくなつたので、古いことまでほじりだして厄介だ、といふ話だつたが、それもこの節では下火になつたらしい。」

貞三は品のいいまつ直ぐな鼻の片側でほろ苦く微笑つた。ちやらつぽこを言ふ小田ではないので、ほんの数ケ月たらひ廻しにされただけで脆くも兜をぬいで田舎に遁げこんでゐた意気地なさをまともに非難されるより、暖かい言葉が却つて寂しく身に沁みるのであつたが、単純で気のいい小田は思ひがけない邂逅の悦びで貞三のさうした感じ方には気がつかなかつた。茶つぽい合着の肩で相手を押すやうな癖になつた歩きぶりで、並樹の向うの端に入口だけ龕(がん)のやうに見えてゐる講堂に向つて一緒について来た。彼らは数歩だまつてゐた。しかし或る媒質に入つた光が必ずきまつた角度で屈折するやうに、そのあひだにお互ひの思念にのぼつてゐたことはたつた一つしかなかつた。

「あの頃に比べると学校もまるつきり変つちまつたよ。」

「学生課が暇すぎて困りはしないかね。」

「それよりか例の脊広の紳士連があまり用事がなくなつたんで、……

「僕らがはひつた時一番に教はつたのは、教室でも、教授の顔でもなく、折鞄をかかへた脊広から、あの紳士連を区別することだつた、といつてもいいからね。」

「全くだ、若い助手か、助教授のやうな恰好をしてゐた男が、なにか始まると急に飛びかかつて来たのだからなあ。あの中でよくもあれだけみんな勇敢にやつたものだ、と驚くが、しかし今ではあの時代のことはもう伝説だ。」

さういへば、その時彼らの眼のまへにあつた紫泥いろの講堂と、そのまはりの風景には、ネオ・ルネッサンス式の角塔の時計台にも、そこだけ石造になつた車寄から、ゆるい勾配でついたタタキの路にも、広場にも、いはゆる伝説の若い英雄の物語めいた思ひいでが、纏はりついてゐないものはなかつた。どこからとも、誰からともなく、たえず撒かれたビラ、ひそかに待たれた記念的な日や、時期には、必ず現はれた窓の上の赤旗、突然、海の上の黒い竜巻のやうに、制服のデモが広場いつぱいに湧きあがると、富士前署からトラックが駈けつけ、学生は……して厄介だといふ噂だつたが、それもこの節ではやまつたらしい。」

「僕らが入つた時一番に教はつたのは、教室でも教授の顔でもなく、折鞄を抱へた脊広からあの紳士連を区別することだつたと云つてもいいからね。」

「全くだ。若い助手か大学院の学生のやうな風をしてゐた男が、なにか始まると急に……だからなああの中でよくもあれだけ勇敢にみんなやつたと思ふが、しかしあの時代のことは今ではもう伝説だよ。」

さう云へば、その時彼らの眼のまへにあつた紫泥いろの講堂とそのまはりの風景には、ネオ・ルネサンス式の角塔の時計盤にもそこだけ石造になつた車寄から緩い勾配でついたタタキの路にも、砂利の広場にも所謂その伝説めいた思ひ出の残つてゐないものはなかつた。どこからとも誰からともなく絶えず……、ひそかに期待された時期には必ず現はれた窓の上の……、突然海の上の竜巻の

キャベツのやうに片つ端から押しこまれ、運び去られる。豚箱へ、停学へ、放校へ、就職戦線の埒外へ、一般社会の生活の締め出しへ。——しかし斬つたあとからあとからと生ずるキマイラの首にも似て、渦は二三日とは消えてゐなかつた。学生たちはまん中に突入してゐたにしろ、外輪で引きずられてゐたにしろ、その一つの運動に無感覚に生きることはできなかった。彼らを捕へた熱情は、過去の日本の青年たちがいかなる場合に於ても、決して感ずることのできなかつた種類のものであつた。歴史が崩し、積みあげる断層に従ひ、青年たちは——といつても、今ならば大学生活が送れる程度の若者と限定すべきであらうが——さまざまな理念と徳操に時代的に支配された。おほらかで素直な上代の生き方が、中世以来、封建性の確立で組みたてられた枠に厳しい変態を強ひられつつも、なほそれなりに魅力ある思想と情緒を見出した。彼らが若い武士となつた時は、主君の馬前に悦んで討死した。しかも戦ひつつある敵に塩を送る雅量と、寛闊を讃美することを知つてゐた。義務と責任の遂行には、いやうに制服が広場いつぱいに湧き返ると、トラックが駆けつけ、学生は片つ端から玉菜のやうに押しこまれて行く。しかし斬つたあとからあとからと生ずるキマイラの首に似て渦は決して消えなかつた。学生らはまん中に突入したにしても、外輪に留まつてゐたにしても、その一つの運動に無感覚に生きることは出来なかつた。ちょつとした言葉、身振、眼の輝やかし方で彼らはお互ひだけの感じ得るものを感じ取り、名前も知らなかつたものが兄弟になつた。さうして同じ思想、同じ目的、同じ希望で結びつけられてゐる悦びと信頼で、若い熱情を窒固に潑剌とした、また曾つてなかつた高邁な新らしい理念にまで進展させて漲つてゐたものは何処に行つてしまつたのか。

つでも腹を割つさばく覚悟を忘れず、果ては道義の究極の燃焼として、武士道とは死ぬことと見つけた、とまで叫ばせたこれらの考へ方は、武士道の虐げをつねに浴び、七たび飢饉に出逢つてもよいが、戦争だけには逢ひたくないと嘆かせた農民や、その他の丸腰の庶民のあひだにさへ、自分たちはなかなか守れないが、この上なく立派な、美しい徳操の象徴と見なされた。

彼らはまた宗教に於ても鈍感ではなかつた。神仏は矛盾なく信仰に溶けあひ、遅れて渡つて来たクリスト教さへ、その迫害と禁止が昔話となつた明治時代に於ては取りわけさうであつたが、生新な、西欧的文化を道伴れにしてゐたことにより、真に宗教的な求道者でない青年たちをも、一種教養の色彩でひきつけた。一世代まへの父祖が、孔孟の格言をなにかにつけて語りだすのと同じ調子で、彼らは聖書のさまざまの言葉をたやすく口にのせた。

「人はパンのみによつて生くるものにあらず。」

それもその中から学んだ一句であつた。精神生活の高

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo